

は、凍融のくりかえし血清では、凍結保存の血清の測定値 ± 2 SD を基準とした場合、凍融の回数は IRI, CPR の 20 回から T₃U の 50 回の間であった。また、 ± 1 SD を基準とした場合は AFP の 6 回から T₃U の 33 回の間であった。室温保存の血清では、IRI, CPR の 7 日から、フェリチンの 224 日間であった。

このように凍融を相当回数くりかえしても、また、室温保存のように腐敗した血清でも、比較的安定な原因として考えられることは、①RIA は免疫学的 radical をとらえて物質の量としている、②プール血清の作成は、凍結融解を数回以上くりかえし、血清をいためつけてから作る、③アルブミン領域の安定性が高い、などがあげられる。

31. ヒト C 末端および N 末端 PTH の Radioimmunoassay

福永 仁夫	曾根 照喜	大塚 信昭	
森田 陸司		(川崎医大・核)	
山本 逸雄	鳥塚 莞爾	(京大・放)	

PTH は血中では生物学的活性をもつ N 末端と、もたない C 末端に分かれて存在する。今回、それぞれの断片に特異的な RIA 系を確立し、臨床的有用性を検討した。N 末端の測定はヒト (1-34) PTH を用いた系にて行い、C 末端の測定はヒト (65-84) PTH (standard), 抗ウシ (1-84) PTH 抗血清 (抗体) と ¹²⁵I-tyr-(65-84) PTH (tra-

cer) を使用した系にて行った。sensitivity はそれぞれ 150 および 160 pg/ml であり、正常値はそれぞれ 400 および 500 pg/ml 以下に分布した。正常者と prim. hyperparathyroid. との overlap は、N 末端 assay では 65 %, C 末端 assay では 21 % に認められた。したがって、prim. hyperparathyroid. の診断には C 末端 assay の方が有用であることが示された。

32. 培養細胞における ⁶⁷Ga-citrate, ⁵⁹Fe-citrate および ¹²⁵I-transferrin の動態の比較

村中 明	曾根 照喜	大塚 信昭	
福永 仁夫	柳 真佐子	森田 陸司	
		(川崎医大・核)	
西下 創一		(同・放)	

⁶⁷Ga の腫瘍集積機序を鉄の場合と比較するために、種々の培養細胞における ⁶⁷Ga, ⁵⁹Fe-citrate および ¹²⁵I-transferrin (Tf) の動態を検討した。HeLa S3 における 4°C および 37°C での Ga と I-Tf の摂取と排泄の検討から、Ga は Fe の場合と同様に Ga-Tf として Tf receptor を介して細胞内へ endocytosis された後、Tf から離れて細胞内に留まり、Tf は早期に細胞外へ代謝されているものと考えられた。しかし、細胞の種類によって、I-Tf uptake と Ga uptake は相関せず、Ga の動態に Fe とは異なった因子が影響していることが示唆された。